

東北からまちと建築の未来を考える



講師：伊東 豊雄 氏 (建築家・伊東豊雄建築設計事務所 代表取締役)

20世紀の機能主義からの脱却を模索する建築家・伊東豊雄氏。東日本大震災の復興計画にかかわる中、自然を活かしてより人間らしく心地よく暮らせる「みんなの家」を設計した。建築・人・自然を一体に捉えた「まちと建築」の未来について語った。

建築家として何ができるのか？ 「私」を超えるというスタンス

設計を始めて40年を迎えた2011年は、自分自身の建築思想を問い直す年となった。4月に伊東建築塾という私塾を開校し、これからの時代や社会に要請される、若く優れた建築家を育成する試みを始めようという中で、3月に東日本大震災が起きた。

すぐに隈研吾さん、妹島和世さんら5人の建築家と「帰心の会」を作り、東日本大震災からの復興に向けて建築家に何ができるのかを模索した。「批判をするよりも、どんな小さなことでも今日できることから始める」。そして、「『私』を超える」というのがスタンスだ。

建築の原点を再確認した 「みんなの家」

被災地の避難所での暮らしは寝泊まりするスペースを確保するのが精いっぱい、プライバシーを守るためにパーティションが置かれていた。極限状態であっても人間らしく過ごしたいと人々は集まり、一緒に食事をしたり、ミニコンサートを開いたり、何らかのコミュニケーションを交わそうとしていた。建築家は、こうしたコミュニケーションの場をもう少し人間的に、もう少し美しく、もう少し居心地良くすることができるとは。やがて、仮設住宅が

建ち始めたが、仮設住宅も狭いユニットが連なっている閉鎖的な空間だ。そこで、仮設住宅の中に「みんなの家」を造ろうと考えた。いわば、ベッドルームしかない家に共同のリビングルームを造るような試みだ。

私がコミッショナーを務めている熊本県が資金や木材を提供することになり、仙台市長に相談し、プロジェクトが実現した。

みんなの家では、住民と建築家とが話し合いながらプランを練った。そして既設の集会所も使えるよう広い縁側でつなぎ、キッチン・トイレ、十数人が囲めるテーブルや薪ストーブ、置き畳、学生ボランティアが作ってくれた家具を配置した家が完成した。みんなの家は、コストは少ないものの、管理が面倒などの理由で、自治体からは好まれない。しかし、心の安らぎが得られ、未来への希望を語り合える場所になる。竣工式の夜、住民の方々は「明かりが温かくてうれしい」「木の香りが何とも言えない」と涙を流して喜んでくださった。

人間も建築も 自然の一部という建築思想へ

今年8～11月に開催されるヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館コミッショナーの委嘱を受けた。これから日本を代表するであろう3人の

若い建築家・藤本壮介さん、平田晃久さん、乾久美子さんに声をかけ、陸前高田市に建設するみんなの家の計画と、これからどういう建築を手掛けるべきかの議論のプロセスをビエンナーレの会場で世界に問うことにした。

陸前高田では、中心街と海が一望できる高台で、復興していく街を高い所から見守りたいという気持ちを込めてタワー状の建築物というアイデアを固めた。塩を被って立ち枯れた杉材を使って高さ10mの柱を20本ほど立てた。

また、釜石でかかわっている復興計画でも、自然と一体化した計画が必要だと提言している。この地は漁業が中心なので、家を訪ねる際には海側のテラスから自由に入って行けるようにし、20m近い擁壁にもたれかかるようにして建つ海に見える集合住宅を提案した。ここにも漁師が集う「みんなの家」を造るという計画である。

これからわれわれはどのような建築を志向していけばいいのか。今、太陽光や地下水、換気を利用して消費エネルギーを半分に抑えた施設を設計している。昔の日本の木造住宅は大変良くできていた。南と北とでは生活している人々の温度の感じ方も違うのではないか。現代のシミュレーション技術を使い、もっと自然に近付けた快適な環境が建築で実現できるはずだと私は考えている。